

『特命全権大使米欧回覧実記』における博物館思考の検討

メタデータ	言語: ja 出版者: 駿台史学会 公開日: 2023-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駒見,和夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000159

『特命全権大使米欧回覧実記』における 博物館思考の検討

駒 見 和 夫

要旨 明治政府による米欧派遣使節団の報告書である『特命全権大使米欧回覧実記』には、一行が視察した博物館の記録が論説とともに綴られている。大使岩倉具視の随行員である久米邦武が編集執筆したもので、博物館施設に関しては施設や展示の状況を記すだけでなく、西洋の考え方を日本や東洋と比較し、博物館の本質や普遍的原理を捉えるべく考察を加えている。執筆者の久米が博物館をどのように理解したのかを捉え、日本で博物館観が醸成されていくなかで、その言及の史的意義を明らかにするのが本稿の目的である。

まず、博物館関連の施設表記の意図を検討し、ついで、久米の思想背景を修学経歴から捉え、これを踏まえて博物館にかかわる記述を検証して、博物館の役割と意義に対する認識を把握した。その結果、久米は日本で培われた思想を軸に置き、ここに米欧のミュージアムというシステムと概念を博物館として位置づけようとしたと捉えられた。このような博物館理解は、久米が修めてきた学問が朱子学を主とした漢学であり、それが岩倉の目に留まって大使随行を務めたことを背景としていた。

明治初期のわが国の博物館の理解は、福沢諭吉の『西洋事情』に代表されるように、西洋の博物館の様子をありのままに捉えて理解に努めるもので、西洋社会を追究した洋学者による博物館観ということができる。これに対して、漢学者の観点から日本で培われてきた思想の延長に博物館を位置づけようとした考究は、久米以外に見出すことはできない。久米は博物館の理念を明確にするまでには至らず、その言説は博物館施策に影響を及ぼすこともなかった。欧化主義のもとで展開されたわが国の博物館では、幕政下の漢学思考をもとにした認識や理解は等閑に付されるものであった。しかし、博物館を思想的に捉えようとした久米の考究は、わが国に博物館を定着させるうえで極めて有意義なものだったはずである。その観点による検討がほとんどなかったことが、日本の博物館の理念が今日でも希薄な要因の一つと考えられる。

キーワード 米欧回覧実記, 久米邦武, ミュージアム, 博物館理念, 漢学思想

はじめに

『特命全権大使米欧回覧実記』（以下『実記』と略す）は、明治政府が岩倉具視を特命全権大使に任じ、米欧に派遣した使節団の報告書である⁽¹⁾。一行は明治4年（1871）11月から同6年9月の間に12ヶ国を歴訪した。『実記』は大使随行員の久米邦武が編集執筆し、明治11年（1878）10月に太政官記録掛刊行で博聞社から出版された。例言に、「本編ハ大使公務ノ餘、及ヒ各地回歴ノ途上ニ於テ、總テ覽勸セル實況ヲ筆記ス、是ヲ以テ回覧實記ト名ク、故ニ使節ノ本領タル、交際ノ應酬、政治ノ廉訪ハ、反テ之ヲ略ス、別ニ詳細ノ書アレハナリ」とあり、使節団の本務の活動とは別に大使の視察などの行動を綴ったものとしているが、刊行経緯などから公的な報告書に位置づく。

『実記』には博物館の視察記録も論説を付して記されている。明治初期の博物館に関する考察では数少ないうちの一つである。論説は久米の認識を示したものではあるが、例言に「畠山氏（書記官の畠山義成、回覧時は杉浦弘蔵）ト意ヲ協シ」、また「各理事官ノ理事功程中ヨリ抄録シ」「固リ皆之ヲ架空ノ臆説ニ結構シタルニアラサレハ」と記しており、大使をはじめとした使節団の見解も少なからず反映しているとみてよい。そして、「復命ノ後ニ、再三校訂ヲ加ヘ、理、化、重諸科、統計、報告、歴史、地理、政法等ノ書ニ覽シ」とあり、帰国して刊行までの間にも、回覧した事物の理解について熟考した様子がうかがえる。

この『実記』は回覧の報告として施設や制度の状況を記すだけではなく、西洋の考え方を日本や東洋と比較し、それらの本質や普遍的な原理を捉えるべく考究されており、博物館に関する記載も同様である。『実記』を読み進めると、未知なる博物館という存在を詳察して理解を深めようとした久米の姿勢は、制度や仕組みを取り入れるというだけではなく、西洋的な思想を、日本で培われてきた物事の考え方とすり合わせる試みではなかったかとの感が強くなる。この点の検討と考察が本稿の目的である。

1. 『実記』に記された博物館とその関連施設

岩倉使節団の主たる目的は、条約締結国の各国元首に国書を捧呈して聘門の礼をとり、条約改正打診の予備交渉を進め、米欧諸国の制度や文物を調査研究することであった（田中1977a p.404）。これらの任務を受けて、大使一行が視察した歴訪国の制度と文物の調査研究報告に『実記』は位置づく。使節団が果たした役割に関しては、例えば副使の木戸孝允は先に帰国して「憲法制定の建言書」を政府に提示し、同じく副使の大久保利通も「立憲政体に関する意見書」を政体整備に従事する伊藤博文に提出している。つまり、明治政府のもとで近代国家をどのように構築すべきかを実務的に考えながら、その方法を早急に策定することも念頭に置き各国を回覧していた。

『実記』の記事から、大使一行が視察した博物館関連施設を抽出すると表1(文末)となる⁽²⁾。米欧各国で、約1年半の間に65を超える当該施設を訪れている。また、大使らの公式訪問にはないようだが、1872年11月17日のパリの記載には、「“コンゴルト”苑」(Place de la Concorde)に「博物観、博覧会等、此苑中ニ建築シ」とあり、「“ルーヴル”宮」(Musée du Louvre)が「中ニ拿破侖第一世ノ遺物、名畫、古器、雛形、諸機ヲ蓄へ、寶庫トナシ縦觀セシム」として人びとに公開していること、「“セイン”河」(la Seine)西北の「製作展觀場」の存在、「ボァーデ、ブロン」(Bois de Boulogne)の背後と「レキセンボルク」(Jardin du Luxembourg)の辺りに「禽獸園」があるのを紹介している。他の随員から得た情報と推察される。

まず、博物館にかかわる諸施設の表記について検討する。

サンフランシスコの「ウッドワルト公苑」の記事では「博物館」に「ミシヤム」のルビを付しており、Museumの訳語に「博物館」を充てたのがわかる。最初の博物館の記述であるため注釈としてルビをふったのであろう。また、ロンドンでの記事に「“ブリッチ、ミジエム”ハ、大英博物館ノ謂ナリ」とあり、名称にMuseumの語が付く施設には博物館の呼称を充てたとみられる。

博物館は、福澤諭吉が慶応2年(1866)に著した『西洋事情』初編で一項を設けて解説しており(福澤 1866 pp.41-43)、明治初期にはその語句の認知が進んでいた。明治4年(1871)9月には、文部省の博物局の観覽場に博物館の名称が付されている。翌年に刊行された開拓使の『英和對譯辭書』⁽³⁾ではMuseumを「^{ハクブツクワン}博物館」と訳しており、翻譯辭書における最初と指摘される(椎名 1993 p.48)。したがって、使節団の渡航から『実記』の編纂のころには、博物館はMuseumの訳語として定着していたとみてよい。なお、『実記』では「博物観」の字句も用いている。第4篇のロシアの記事以降に偏り、また、ポンペイの博物館の記事に「博物館」と「博物観」の表記が混在していることから、意図的な区別とは考えにくい。

博物館に類似の名称としては「博古館」「博覽場」「博覽館」が使われている。「博古館」は展示内容からすると、古代に遡る器物の収蔵展示施設に充てたようである。「博覽場」はパリのコンセルヴァトワールの博物館の説明に「農業工藝ノ諸器械ノ常博覽場ナリ」とあり、固有の施設名称に使ったものではない。「博覽館」はロンドンのサウスケンジントン博物館で用いている。「常博覽會」とも記しており、第1回ロンドン万国博覽會を受け継いだ創立を勘案した表記とみられる。「博覽會」に関しては、「維納萬國博覽會」(ウィーン万国博覽會)と、詳細は不明だがロンドンで「フリンズ、アルベルト、ロード」の「博覽會」の記述がある。博覽會の熟字は、元治元年(1864)ころに幕府医官であった栗本鋤雲がExpositionを邦訳したものとされる(椎名 2005 pp.6-7)。福澤も慶応2年(1866)の『西洋事情』で博覽會を説明しており、明治4年(1871)3月には大学南校物産局博物局が博覽會大旨の上申を出すなど⁽⁴⁾、

その用語の定着が看取できる。しかし、前掲した明治5年(1872)の『英和對譯辭書』は Exposition を「全上 (Exposer : 我が身ヲ、ニ委ル人) ノヲ。開キ置クヲ。解明スヲ」と説明し、博覧会とは訳していない。博覧会の翻訳元の Exposition が世間に認知されるのは遅かったようである。

絵画類を収蔵展示する施設は「藏畫館」「集畫館」「集畫院」と記している。これらにはルビをふっていないため、訳語ではなく、施設の内容から充てた熟字であろう。このうち「藏畫館」と「集畫館」は、それぞれの内容を比べても明確な区別は捉えがたい。「集畫院」はアムステルダムで訪れたもので、「常ニ府中ノ畫人來リ、就テ摸写シ、其法ヲ學ヒテ、美術ヲ講窮スル為メニ設ク」と解説しており、学校に類する教育的な施設と理解したと考えられる。ゆえに院と表字したのではないだろうか。「美術館」の語句も2か所でみられるが、博物館の説明のなかで記された言葉で、施設名称としては使っていない。これらの熟字の意図は後に考察する。油画を展覧したパリのパノラマ館については「觀場」と表示している。

また、「寶庫」の表記があり、展示空間を有する旧の城塞(ロンドン塔)や宮殿(エルミターージュ)に充てている。歴史的な武器具とその関連資料の観覧施設は、「武庫」「武庫倉」の普通名詞による表記である。ほかに、「書庫」は基本的に図書館を指しているが、ヴェネチアの「アルチーフノ書庫」のように、歴史的な古文書類の収蔵展示施設もこれと区別せずに用いている。

「禽獸園」「水族觀」「草木園」は、それぞれ動物園、水族館、植物園の表記である。「禽獸園」は6か所の施設の記事にあり、すべてにこの名称を充てている。サンフランシスコの「ワードワルト公苑」では「禽獸」に「ヂョーロチ」のルビをふり、ロンドン動物園(The Zoological Gardens)は「ヂョーロチ、カーテン」と記して「禽獸園ノ謂ナリ」とあることから、Zoology を禽獸としたことがわかる。福澤の『西洋事情』初編ではすでに「動物園」と表記しており、『英和對譯辭書』でも Zoology を「動物學」^{ドウブツガク}と邦訳している。動物園の名称は、明治15年(1882)に開館した農商務省所管の博物館にそれが併設されたことで一般化する。『実記』の「ワードワルト公苑」の説明では、その様子を「其他豹豺貉狢ナト、ミナ肥壯ナルヲ野ニアルカ如シ」としている。「豹豺貉狢」の表現について、「豹」^{ひょう}に続く「豺」^{さい}は漢語でオオカミ類の野獣を指し、邪で残酷な人の例えでもある。「貉」^{かく}はムジナのことであるが妖怪視もされる言葉で、「狢」^{ぼく}は猛獣を意味する。「豹豺貉狢」からは、道理をわきまえないような人間と同様のケダモノと、飼育の動物をみている感を受ける⁽⁵⁾。このような意識が久米や使節団にあったことから禽獸園と表記したと考えられる。

「水族觀」と「草木園」はいずれも1か所の記載で、前者には別に「水族室」(イギリスのブライトン)の表記もある。規模の差による区別とみられる。「草木園」はサンフランシスコの「ワードワルト公苑」にあり、「ボタニック」のルビから Botanic の訳語名称とわかる。

「司文臺」と「天文臺」は、ワシントンのジョージタウンの「司文臺」を「ナショナル、オブ、

ゼルウエトリー」と説明しており、Observatory の訳である。「天文臺」は、施設内容の点で「司文臺」と大きな違いはみとめられない。『英和對譯辭書』では observatory を「^{シテンダイ}司天臺」としており、訳語となる熟字が未だ定まらない状況がうかがえる。

ほかに、ワシントンの「アグリクリチュワル、ホール」(Agricultural hall) を「勸農寮」としているように、実態を表現する言葉への苦慮が看取される。また、複数の目的を併せもつことなどから邦訳の普通名詞を充てがたい施設には、「パテント、オヒス」や「スミノニヤン」のように母語の名称をそのまま使っている。

以上が『実記』における博物館関連施設の表記の大略である。ところで、幕府による万延元年(1860)の遣米使節団と文久元年(1862)に出発した遣欧使節団も、博物館に関する記録が団員の日記などに残されている。遣米使節団はワシントンで Patent Office と Smithsonian Institution を訪れた。通弁の名村吾八郎元度は Patent Office に対して博物館の語を初めて用いたが、他の団員はいずれも異なる表現や呼称で二つの施設を記している(駒見 2019 p.16)。この後の遣欧使節団は 50 か所近くの博物館施設を回覧した。ここでは団員間に博物館の表記のひろがりが見とめられ、禽獸園、草木園、司天台の用語も多くが使っている(駒見 2020 p.37)。『実記』と比較すると、当該施設の表記は文久の遣欧使節団の記録と多くで共通する。明治 4 年(1871)の岩倉使節団の派遣はわが国が博物館創設に向けてスタートを切る時期と重なるが、その表記は文久遣欧使節団により枢要が固められていたとみてよい。

2. 久米邦武の学問

『実記』に示された博物館の役割や意義を理解するにあたり、久米邦武の思想背景を把握しておきたい。『久米博士九十年回顧録』(石井・川副 1934)をもとに、米欧回覧までの学問にかかわる経歴から捉えていく。

久米邦武は天保 10 年(1839)、肥前佐賀藩士久米邦郷の三男として佐賀城下に生まれた。父の邦郷は 10 代藩主鍋島斉正(のち直正)に仕え、大坂蔵屋敷詰、長崎問役、有田皿山代官、御側頭の大要職を歴任した能吏であった。大坂詰の折には、邦武の求めに応じて多数の書籍を送るなど(回顧録・上 p.231)、子息育英の熱心さがうかがえる。

回顧録をたどると、7 歳の時に『和漢三才図絵』を通して文字に親しみ、兄による『大学』の素読が最初の学びであったという(回顧録・上 p.201)。『大学』は『論語』『孟子』『中庸』とともに儒教のもっとも基礎的な四書の一つで、当時の武家では学問の入門によく授けられた。翌年の弘化 2 年(1845)に藩校弘道館蒙養舎へ「論語の初巻を持って」入学し(回顧録・上 p.202)、11 歳になると藩校教師の武富圮南の塾にも通い(回顧録・上 p.229)、安政元年(1854)に元服して弘道館内生寮に進んだ。この時期には、佐賀藩士で国学者の枝吉神陽が、尊王論を唱えて結成した「義祭同盟」にも参加している。久米の言によれば、尊王攘夷の主義や主張が

あったわけではなく、楠木正成公像への幼児の親しみと八幡社の近所に住んでいた縁故で列したのだという（回顧録・上 p.319）。また、11代藩主の直大が佐賀に初入部した際には、書生の首席として論語の御前講義を担った。こうした評価から文久3年（1863）に江戸遊学の藩命があり、幕府直轄の昌平坂学問所の書生寮に入学した（回顧録・上 pp.494-495）。蒙養舎入学以降、弘道館での学びは17年間にわたる。

久米が学んだ藩校の弘道館は、8代藩主の治茂が聖堂を藩学に整えて天明元年（1781）に開学し、天保元年（1830）に家督を継いだ10代の斉正が人材養成のために拡充し奨励した。藩校教育の根底には、一般的に、儒学主義にもとづく智徳の培養を中心に封建的秩序の倫理的安定を目指す企図がある。そのなかで弘道館教育の目標の肝は、教授の古賀殻堂が草した『学政管見』などの史料から、「藩政の根本として、一藩の士風を励まし、風俗を敦くし、治国の用に供すべき人材を育成することにあつた」（井上 1978 p.551）と指摘される。つまり、読書講釈だけでなく、国家有用の人材を育成し、風俗を矯正するのが弘道館の教育の眼目であり、政治に直接つながる学問を振興させるものであった。久米が学んだ弘化以降の時勢では、その指向がより強くなっていた。

幕末の佐賀藩には、医学寮好生館や洋学の蘭学寮、理化学研究所の精錬方、海軍学寮、長崎の蕃学稽古所（致遠館）なども設置されていた。藩主斉正が主導した藩政改革と西洋技術導入策のもとで、学問の推進や科学技術の実践的な追究が他藩より抜きん出ているのはよく知られている。西洋の知識と技術の積極的な導入を進める佐賀藩において、久米が終始向き合ったのは弘道館での朱子学であった。

昌平坂学問所での久米の修学は約1年間で、元治元年（1864）に退学帰藩している。書生寮在寮中、全権を託された舎長の助勤に任じられており（回顧録・上 p.540）、優秀な書生だったことが知られる。朱子学を採用した昌平坂学問所の目的は直参教育を原則としたが、江戸後期には諸藩士も多く学んでいた。世情の急転に対応するため、安政2年（1855）には学制改革が企図され、経義・史学・詩文の三科中、史学科に属する皇朝史学・刑政学・外国事取調の担当の新設などを実施したが、結果的に保守傾向から脱皮しきれなかったとみられている⁽⁶⁾。安政以来の時勢の変動で漢学に励むことへの人気は衰え、書生寮は七分程度しか埋まっていなかったという（回顧録・上 p.521）。このような状況下で久米が学んだ昌平坂学問所の思想は、藩校弘道館の延長といえるものであった。

帰藩後、久米は隠居した前藩主の直正（閑叟）の近習を勤め、慶応3年（1867）に28歳で家督を継ぎ、翌年には藩校弘道館の教諭となり明治維新を迎える。弘道館教諭の久米は学館の改革に取り組み、それは学問の正課を儒教の道徳として実践躬行を主とし、課外に和漢洋を通じて地理・地誌・物理・歴史・詩文・政治・法律・経済・兵制・数術に分類した科目を置くものであった（回顧録・下 p.77）。ここでも佐賀藩の伝統的な朱子学や儒学の教育が芯となっ

ている。明治2年(1869)になると府藩県制のもとで佐賀県権大属に任じられ、弘道館教諭を辞して藩政改革の草案を担った。

その後、明治4年(1871)の廃藩置県にともなって鍋島家家扶となり上京し、ほどなく岩倉使節団の随行の命を受けて太政官権少外史に任命され、同年の11月に米欧回覧に旅立つこととなる。32歳であった。久米が使節団の大使随員に就いたのは岩倉具視の求めであり、和漢に学識のある皇漢学者⁽⁷⁾を随行させたい意図で久米を加えたという(回顧録・下 p.176)。洋学者ではなく、在来の学問や漢学を修めた人物を岩倉は望んだのである。経歴から明らかなように、久米は幕末の動乱の影響を直接的に被ることなく、「現実的実務家の父のもと、めぐまれた教育環境のなかで正統派的な漢学の素養を身につけていった」(杉谷 1991 p.96)のであった。まさに岩倉の意図に適う思想と学識をもつ人物だったのである。

岩倉使節団が米欧の回覧で得ようとしたものは、日本の伝統的な政体に、米欧の先進的な技術や制度をどのように取り入れるかを展望する将来構想であったと推察できる。そこでは「和魂洋才」がキーコンセプトであったとも指摘される(芳賀 1990 pp.119-122)。一行の大多数は元攘夷論者で、長旅の船中で何彼と激論し、西洋通と呉越同舟であったからなおさら喧しかったと久米の回想にある(回顧録・下 pp.180-181)。使節団の土台を「和魂」としていたことの表れであろう⁽⁸⁾。また、全権大使の岩倉は皇室や公家の制度を守る立場でもあり、「和魂」は疎かにできない意識であったに違いない。ゆえに、回覧中の記録をつかさどる人物は皇漢学者でなければならず、この岩倉の思いを久米は十分に理解して務めたとみられる。やがてまとめられた『実記』は、カタカナまじりの文語体で綴った漢文脈の文章であり、それは皇漢学者として随行した久米の矜持でもあったと思慮される。

3. 博物館の役割に関する理解

博物館の役割や社会的な意義を久米がどのように捉えたかは、認識の核になる部分を大英博物館の記事(第25巻)から読み取ることができる。

そこでは大英博物館について、英国内外の75万冊の文書・書籍を蔵する「書庫」と、数万点の貝類・化石類・獣鳥魚類の標本の「礦石ノ室」、各国の石器・玉器・銅器・磁器・石像・碑文・古棺などを収めた「博古ノ室」などを紹介し、「苟モ學ニ志シ、業ヲ研スルノ人ハ、男女ヲ論セス、科課ヲ議セス、ミナ人ノ來館シテ益ヲ獲ル所タリ」と評している。つまり、膨大なコレクションを設ける大英博物館では、どの分野であれ学びを志して研究する人たちには有益だと述べ、これを収蔵する博物館の意義をつぎのように説いている。

博物館ニ觀レハ、其國開化ノ順序、自ラ心目ニ感触ヲ与フモノナリ、蓋シ國ノ興ルヤ、其理蘊ノ衷ヲ繙クコト、俄爾トシテ然ルモノニアラス、必ス順序アリ、先知ノモノ之ヲ後知ニ伝ヘ、先覺ノモノ後覺ヲ覺シテ、漸ヲ以テ進ム、之ヲ名ツケテ進歩ト云フ、進歩トハ、

り」とあり、西洋の進歩の根元は古きを大切にする性質にあると結論づけている。西洋で起こった博物館について、西洋の歴史的な思想や経緯、また西洋人の気質などを汲み取りながらその意義を説き、国家が善き知を得て進歩する存在として価値をみとめるのである。同様に、ヴェネチアの「アルチーフノ書庫」の論説（第78巻）では、書庫や博物館が資料を保存することに対して、「西洋ニ博物館アリ、瑣碎ノ微物モ、亦摺ンテ藏ス、書庫ノ設ケアリ、廢紙斷編モ亦収録ス、開文ノ至リナリト云ベシ」と指摘し、西洋のその姿勢を評価している。

博物館の意義において、積み重ねてきた知識を大事にすべきとする見解はナポリの博物館の記事（第77巻）でも綴っている。

天地間ノ一研窮セサルナシ、是文明ノ文明タル所ナリ、我邦ノ近來、多ク西洋ヲ認メテ、簡易ト看做シ、従來ノ稍明カナルモ、之ヲ廢棄シテ、自ラ以テ開化トシ、文明トスルモノモアリ、殊ニ知ラス、是反テ文明ニ背テ走ル所ナルヲ

あらゆる物事を深く考えることこそ文明と久米は捉え、西洋をみとめるあまり、わが国で明らかにしてきたことを棄て去るのは文明への背信だとする。西洋の思想や仕組みを評価しつつもその一辺倒の風潮を顧みて、儒学や朱子学の究理によって築き上げてきた物事を蔑ろにすべきではないとの考えである。

博物館の実益的な意義は、コペンハーゲンの「民種學ノ博物館」（第67巻）でも述べている。世界各地の民族資料の展示観覧から、「學藝ノ要ハ、天良ヲ發シ、衆知ヲ蒐集スルニアリ、要求スル成果ハ、工技貿易ヲ廣メテ、富庶ヲ逐クルニアリ」として、各民族がもつ良いものを見つけ出して衆人の知恵を集めるのが学芸のかなめであり、その工技の交易によって国の産業を発展させることへの寄与が求められる成果だという。そのうえで、「民種學ノ博物館ヲ一見スレハ、此等ノ開明ニ、大ナル有益ヲ受ルモノナリト云」と述べ、知識を啓くことへの博物館の有益性を指摘する。ほかにも、パリのコンセルヴァトワールにかかわる論説（第43巻）では、工芸博物館について以下の理由を示し、国民の利益を増大させるものと説いている。

蓋天産ヲ化治シ工産トナスニハ、其原品ヲシリ、其形状ヲ變シ、其技ヲ美ニシ、之ヲ人ノ嗜好ニ投合セシムレハ、需用盛ンニシテ、價格ヲ騰上ス、此數項ノ意想ハ、之ヲ天來鑿空ニ得ヘキモノニ非ス、必ス其物ヲ知リテ、其形ヲ視、其技ヲ習ハシテ、其好ミヲ察スヘシ、然ラサレハ、天ヨリ美良ノ物品ヲ國民ニ賜ヒタルモ、術ヲ施シテ天良ヲ發セシムルヲ能ハス

この説明では、天然の産物を加工して製品とするには、原品について知り、加工技術を向上させ、人びとの嗜好に合わせることで、需要が高まり価格は上がるという。ゆえに、原品の形状を観察して加工技術を習熟し、人びとの嗜好を推し測って考えることがなければ、天然の優れた産物があっても良い製品は生まれぬ。そこに工芸博物館の実利的な寄与をみとめるのである。パリの工芸博物館については、「館ニ附屬シテ學校アリ、講壇アリ、目ヨリ導キテ、耳

ニ及ホシ、耳ヨリ教ヘテ目ニ及ホシ、耳目ノ兩竅ニヨリ、直ニ其頭漿ニ開明ノ智ヲ輸送ス、是此館ノ大益アル所ナリ」との説明があり、学校との併設によって一段と人びとの実益になることを述べている。博物館の実益的な価値の根本は、知を啓くものとする認識なのである。

博物館の実利については、サンフランシスコのウッドワルト公苑（禽獸園草木園博物館、及ヒ藏書館ヲ兼タル場）の論説（第3巻）にも言及がある。

西洋人ハ有形ノ理學ヲ勉ム、東洋人ハ無形ノ理學ニ驚ス、兩用國民ノ貧富ヲ異ニシタルハ、尤此結習ヨリ生スルヲ覺フナリ、西洋各都府ニ草木園禽獸園アルハ、我植木屋禽獸觀場アルト、其大小ヲ差シテ、其外貌ハ相似タリ、然レ其設置ノ本領、元來相反セリ、西洋ニテ此等ノ設ケハ、皆人ノ耳目ヲ誘キ、聞見ヲ實ニシ、以テ生業ヲス、メ、學知ヲ博クセシメルニ出テ、莫大ノ費用ヲ耗スルモ、曾テ吝マサルハ、別ニ大利アルニヨルナリ

理学は朱子学の思考において理の学であり、幅ひろい思想を指す。すなわち、西洋人は形のある実際的な追究、東洋人は形をとらない思想的な追究を特徴と捉え、国民の貧富の違いはこれによるものとみなすのである。そして、西洋の草木園や禽獸園を例に、これらは人びとの関心をひきつけ、暮らしの手立てとなる実際的な知識を学び理解するために、莫大な費用をかけても設置するのだという。さらに、「其利潤ハ有形理學ヲ進歩シ、農工商ノ實益ニ發見シ、富庶繁榮ノ媒トナル」とあり、博物館や藏書館も含めてそれらの場は、実際的な学究を進展させて農工商業に役立つ物事の発見につながり、国が富み繁榮する利があると述べている。西洋の実利的な合理主義の姿勢を評価し、禽獸園や博物館などはその実利に適うものと捉えたのである。このような点で「東洋ノ無形理學」の姿勢と思考を卑下する感がみられる。

一方で、西洋の「有形ノ理學」への批判もある。ライデンの大学附属の博古館で古棺と10余の「并屍」（ミイラ）を觀覽し、「室ヲスキテ穢ヲ覺フノミ」と嫌悪を示している（第53巻）。ミイラの展示に対する同様の言及は万延元年（1860）の遣米使節団でもみられ、正使の村垣淡路守範正が厳しく咎めていた。スミソニアンスミソニアンの展示において「人骸の乾物」と表現し、「天地間の萬物を究理する故、斯の如きに至るといへど、鳥獸蟲魚とひとしく人骸を并て置は言語に絶たり。額に汗するといふ古語に反復せり。則夷狄の名はのがれぬ成るべし」（吉田編 1959 pp.190）と綴り、語気は峻烈である。西欧的思想への違和感と批判の内在が指摘されるが（松宮 2003 p.12）、村垣は西洋を蛮国と蔑む姿勢を随所で見せており、そもそも偏向的な意識が強い（駒見 2019 p.20）。しかし、究理のためであっても人骸を動物標本と並べる展示は卑しむべきとするのは、儒学や朱子学の思想を反映した認識とみてよい。朱子学においてひろく事物の道理をきわめるための究理は、すべては心のために、事も包括した物の理を突き詰めることから始め、心と理の融合の先に存在する。心ある人を敬い、礼を大事とする究理において人骸はただの物体ではなく、それを人前にさらす行為は到底容認できることではなかった。『実記』に記された久米の理解も背景を同じくするもので、善に導く究理に反するそのありよ

うは拒絶すべきものであった⁹⁾。ただし、久米は博物館の原理を見定めようとしており、村垣の姿勢とは大きく異なる。

また、ベルリンの集画館において、男女の裸体をモデルに塑像作りや写生をする様子の記述がある（第58巻）。モデルが動かずに横たわり、1週間や長期の場合には7週間も毎日同じことを繰り返す実情を知り、「人ノ肉體ヲ寫スヲハ、畫工ノ最モ心ヲ盡ス伎倆ナリ、然レ其精ヲ求ムル弊ハ、此醜狀ニ至ル、頗ル厭フヘキヲ覺ヘタリ」としている。人としてのモデルに対して礼を失し蔑ろにするとみた批判である。朱子学を修めた久米にはこれも心と理の調和に反する様態であり、絵画の技巧を高める目的であっても許容されるべきものではなかった。

4. 博物館の様相に関して

久米は、博物館施設の展示の状況も多岐にわたって記している。サンフランシスコの「ウードウルト」公苑（第3巻）では、展示方法について、「禽鳥ノ種類ヨリ、虫多鱗介の小ナル其卵ヲ孵化シ、殻ヲ脱シ蛾ニ化シ、或ハ子ヲ字養シテ巢ヲ構フナト、搜羅討索シ、類ヲ以テ品列ス」とある。プロセスと分類がその軸をなすと捉えた理解であり、展示を仔細に観察して手法や技術に迫るこのような所見は少なくない。展示物だけではなく、さまざまな視点から展示技法に注目している点で久米を高く評価する見解があり（山本 2010・2012）、共感できる。博物館の意義や価値を見定めようとしたからこそ、展示のあり方の観察と分析は肝要だったのである。

『実記』にある各博物館の展示物をみると、内容は貝類・化石・鉱石・海獣魚類標本・動物骨格標本などの“自然史”系だけでなく、いわゆる“人文”系の歴史的な器物や、名画・古画・図画・石彫・彫像などの“美術”系も含まれている。大英博物館にかかわる論説で「分ち育スルニ諸科ノ學」と示した実態である。また、「諸科ノ學」のうち分野を絞った博物館をいわゆる専門館とみており、「博古館」の名称は古代に遡る器物を展示する施設に充て、エジンバラの“理工系”博物館は「インヂストリア」を付している。サンクトペテルブルクの「農業博物館」やコペンハーゲンの「民種學ノ博物館」、ストックホルムの農業工芸に益する「工藝博物館」の表記も同じである。

ほかに、ライデンの「此府ノ大學校ニ附屬セル博物館」や、サンクトペテルブルクの「礦山學校ノ博物觀」のように、学校の場に博物館の併設があることにも目を向けている。その一方で、「館ニ附屬シテ學校アリ」とするコンセルヴァトワールの工芸博物館のように、学校を併設する博物館と認識した例もみられる。また、「ケンシントン」の「博覽館」では「附屬ノ學校ヲオキテ、藝術製作ヲ教ユ、目撃ノ効ハ耳ニ聞ヨリ、其益實ニ大ナリ」とあり（第23巻）、コンセルヴァトワールと同様に、博覽館と附属の学校の相乗効果について言及している。

ところで、“美術”の展示施設に対する理解には苦慮の感がある。上記のように“美術”系

も博物館の構成要素とは捉えているものの、それには「藏畫館」「集畫館」「集畫院」の名称を充てている。ブリュッセルのMusées royaux des beaux-arts de Belgique（ベルギー王立美術館）⁽¹⁰⁾を「多ク古畫ヲ集ム」としながらも「博物館」と表記していることから、ハーグのMauritshuis（マウリッツハイス美術館）やヴェネチアのGallerie dell'Accademia（アカデミア美術館）のように、“Museum”の語を付していない“美術”の展示施設を「藏畫館」「集畫館」「集畫院」と表記したとみられる。そして、サンフランシスコの「ウードワルト公苑」の説明に「禽獸園草木園博物館、及ヒ藏畫館ヲ兼タル場」とあることから、「藏畫館」などの“美術”系は「博物館」と区別して捉えていたのがわかる。

なお、「美術館」の表記が2か所ある。いずれも博物館の説明のなかで使っており、一つはコペンハーゲンの「博物館」で「此ハ美術館ニテ、重ニ石雕ノ像ヲ蓄フ、館亦大ナラス、像モ亦多カラス」と記し（第67巻）、石雕像を蒐集する博物館を美術館であると重ねて説明している。いま一つはフィレンツェの「博物觀」（Galleria degli Uffizi）に、「各國ニ設ケタル、美術館、博物館ニ採集シタル、高名ノ雕像描畫ハ、多ク其模造ニシテ、此ニハ、其真ヲ蓄ヘタレハ」の記述がある（第74巻）。先の「藏畫館」などと同じように「美術館」も博物館の範疇で捉えるが、それとは区別した理解とみられる。さらに、ローマの「聖彼得寺ノ博物館」（Musei Vaticani）の記事には、「歐洲列國ノ博物館ニ設ケタル美術室ハ、僅ニ此館ノ一片ヲ摸セルモノト謂テ可ナリ」とあり（第76巻）、博物館の一部門の「美術室」を独立させたものを美術館と捉えたようである。つまり、「美術館」および「藏畫館」「集畫館」「集畫院」は、ひろく博物館に包括される専門館と認識して用いた名称とみてよい。博物館関係の最初の記事となるサンフランシスコの「ウードワルト公苑」の説明で、「博物館」に「ミシヤム」（ミュージアム）のルビを付しながら「藏畫館」にそれがないのは、“美術”を展示する博物館に対する久米あるいは使節団の独自の認識だったからと考えられる。

美術館の名称は、明治10年（1877）の8月から11月に東京上野で開催された第1回内国勸業博覧会の一施設に用いられており、『実記』の執筆編纂の時期には慣用化していたとみられる。“美術”の熟字について、明治41年（1908）出版の『明治事物起原』では、明治5年（1872）1月の「埶地利博覧会賛同出品勧誘」の官命に「音樂畫學像ヲ作ルノ術詩學等ヲ美術ト云」とあることを指摘し、政治家・外交官の大鳥圭介による英語の“Fine Art”の訳語としている（石井 1908 pp.136-137）。訳者や元言語には別の見解もあるが⁽¹¹⁾、明治初期から使用された翻訳語とすることに異論はない。ちなみに、前掲の『英和對譯辭書』（明治5年刊）では、“Art”を「技術。詐謀。計策」と訳している。その後、明治10年に開催された第1回内国勸業博覧会の美術館建物の図をみると、表札に“Fine Art Gallery”の英語のルビがある⁽¹²⁾。

“美術”の概念については『実記』でも言及されている。パリの記事（第42巻、11月17日）の技術に関する文脈のなかで、「器皿ノ顔貌、畫様ノ風致ハ、各國ニ固有ノ美アリ、之ヲ美術

ト名ク、技能ヲ進メルニハ、其固有ノ美ヲ發揮シテ、益高尚ノ韻致ヲ、發明進歩スルヲ主意トス」とあり、美術とは器の形や画風などに表れた各国固有の美しさを指し、技能を進めるための美の発揮や高尚な味わいの作出と進歩がその主意だとする。さらに、「歐羅巴洲工業總論」(第92卷)ではより踏み込んだ見解を示し、“工芸”とのかかわりを述べている。

西洋各國工藝ノ進ムニ從ヒ、美術ノ學モ亦進メリ、美術トハ、畫繪彫刻ノ術ニテ、油繪、石彫ヲ學ヒ、精神風韻ヲ勉ム、高尚ノ雅藝ニ屬ス、喩ヘハ東洋ニテ、書、畫、篆刻ヲ紳士間ニ雅賞スルカ如シ、精神風韻ハ、人ノ才資ニ發スルモノナレハ、毎國米人ニ、各其妙ヲ存ス、他ノ模倣スルヲ得ヘキモノナラス、此ヨリシテ萬般ノ巧技ニモ、其風ヲ帶フ、是ヲ名ケ其國ノ工藝トイフ、仏ノ奇警、以ノ穩當、日ノ縵縵、英ノ重厚ナト、各長スル所アリテ、名譽ヲ有シ、世ニ賞美セラル一國ノ工藝、長ク利益ヲ保存スル所以ナリ、故ニ美術ハ、直接ニ國利トハナラサレバ、間接ニ國利ヲ基ヒスルモノナリ

ここでは、西洋諸国における工芸を学としての美術と関連するものと捉え、美術の進展は精神風韻、すなわち人びとの魂や心を高揚させる高尚な正しい手だてだと説いている。そこから生み出される優れた技巧が各国の工芸であり、これが世間からみとめられると国の利益となり、美術は利益に直接結びつくものではないがその基をなすと捉えたのである。その理解に際し、東洋の書画・篆刻を引き合いに出している点は興味深い。「紳士間ニ雅賞スルカ如シ」と記し、教養を備えた人格の高い人たちの間で正しく愛でられるのが美術だと考え、朱子学や儒学の思考のもとで存在の意味を見定めようとしている。ともあれ、実利の精神的支柱となることに美術の価値をみとめ、それは美、すなわち整ったありようを究めて正しい道理を志向すると理解した博物館の意義と相通じる。ゆえに、美術を博物館の概念に包括されるものと認識したのである。

5. 博物館思想史における『実記』の意義（評価）

日本での博物館思想の導入に先鞭をつけた福澤諭吉は、前掲の『西洋事情』初編で「世界中ノ物産古物珍物ヲ集メテ人ニ示シ見聞ヲ博クスル為メニ設クルモノナリ」と博物館の目的を説明し、いわゆる館種に「ミネラロジカル、ミュゼウム」「ゾーロジカル、ミュゼウム」「メヂカル、ミュゼウム」を、動物園および植物園とともに列記している。福澤の博物館観の芯は、各分野の多種の物品をひろく集めることで人びとの知見を広める啓蒙的な役割を果たすとともに、社会生活における人びとの健康や精神生活面にも益をなすというものである。

その後、西洋思想の受容が一段と進む世情のなかで、博物館という存在の目的や概念をより深く掘り下げて捉えようとしたのが久米の論説だといえる。西洋の歴史的な思想や経緯、人の気質なども見据えて博物館の意義を考え、国家が善き知を得て進歩する存在として、すなわちそれは近代国家におけるいわゆる国民教育を担う一つとして価値をみとめるものである。各種

の博物館が収集展示する自然史や歴史、文書、美術、動植物についても、それぞれの意味を推し測るとともに、博物館の役割との関連にも思考をひろげている。これらの概要を、久米は幕政下で培われた伝統的な思想であり自身も修めた朱子学の文脈で解釈しようとした。

久米が示した博物館認識について、「当時においては、流行ともいえる啓蒙的言説に沿ったものであり、突出した主張と呼べるものは、とくに認められない」とする武田雅哉の見解がある。武田は、同時代に中国人の李圭が記録した『環游地球新録』との比較を通じ、『実記』は「高適な理想を掲げ、いささかお説教じみている」と捉え、博物館の効能は諸処で説かれてはいるが具体的な例証に富んだものではないと断じ、その評価は厳しい。また、漢語調の綴りは、「漢学者」という業を担った一個の人間が、非漢学的世界を見聞し、記述した」ことの象徴とみている（武田 1993 pp.105・107-109）。同様の理解は中野美代子も示しており、禽獣園の記事の検討からそれを表現した漢語熟語について、「修辞の力が衰亡したとき、人は形骸のみを継承する。日本人にいまだに見苦しく残存する“漢詩”趣味や漢語熟語好きは、その末端に位置するものである。久米邦武もまた、その例外ではなかった」と批判的である。さらに、ロンドン動物園の記述にあっては、「対句をちりばめた美文調にするための修辞上の努力が、記述を貧困にしている」との見方を示している（中野 1993 pp.231-232）。

一方で、このような久米の記述は、文章家としての修辞の自覚がたえず働いていたものとみとめる芳賀徹の意見がある。幕末の漢学の教育を受けた者としては当然であり、漢文修辞学を活用しながらもその枠やパターンを拡張し、ときにはそれを打ち破って異質の文明の実像に迫ろうとしたと読み解き、これを『実記』の特質と評価している（芳賀 1985 p.10）。漢語修辞の良し悪しは別としても、維新から10年を過ぎて刊行された『実記』が、米欧の事象や事物の詳述において漢語と片仮名を織り交ぜた文語体を用いることは、時流に逆行するともみられよう。使節団の報告書に位置づくものであれば、なおさらである。しかし、皇漢学者であることを求めて招聘された久米が責務を果たすには、儒学や朱子学の思想を基盤に事物を思考する適切な表現において、漢語調文語体での綴りは必然であったに違いない。

また、久米の博物館観には松宮秀治の批判的な考察がある。久米は博物館に「文明」「進歩」「自主ノ精神」「富強ノ媒助」を捉えているが、そこに西欧のミュージアムの機能の本質的な部分は含まれていなかったと松宮は分析し、示された博物館観はあまりにも狭く、儒教的教養人としての恣意的な切り取りの感が残るとする。背景に、久米が「西欧の歴史にまったくといってよいほど関心を示していない」ことをあげ、「歴史」への無関心、言い換えれば“文化”への無関心が文化と歴史の問題意識においてしか捉えられない“ミュージアム”の本質を見落とさせてしまったことは当然といえばあまりにも当然」と断じている（松宮秀治 1995 pp.272・277）。

たしかに、洋学を修めた経歴がなく、遣欧使節団への随行者も任命から出発まで1週間しか猶

予がなかった久米は（回顧録・下 p.177）、西洋文明に対する関心や知識に乏しかったのかもしれない。課せられた責務において米欧のさまざまな事物からミュージアムにも関心の目を向け、重層的なその概念を把握することは、『実記』の編纂までの期間を加えても容易ではなかったであろう。そうしたなかで久米の基本的な態度は、すでに指摘してきたように、近代の西欧で成立したミュージアムのあり方を、従前の伝統的な学である朱子学や儒学の思考の延長で把握することであった。それは、幕政下に培われてきた日本の思想のうえにミュージアムを融合させ、博物館という存在を浮かび上がらせようとするものである。ゆえに米欧の考え方や仕組みを、合理的・文明的なものとして無分別に取り入れるべきではないと説く。育まれてきた思想や知識を棄て去ることは進歩にはならないと繰り返し述べ、その風潮にある日本の近代思考を批判している。旧来の知識や事物を蔑ろにする姿勢とともに、合理性からあまりにも乖離した観念的な思考については否定しつつも、日本の根元的な思想に反する米欧の合理的な考え方を一方では拒絶しているのである。このように、西洋のミュージアムの概念と日本の思想をすり合わせようとする意識を『実記』の随所にみとめることができる。しかしながら、それを実現した博物館の具体的な姿を浮かび上がらせるまでには至っていない。

岩倉使節団は、アジアにおける日本近代国家像を米欧のなかに模索したことから、中国を主とするアジアと日本をつねに念頭に置き、米欧と対比していたと指摘される（田中 1977b p.180）。博物館に関する『実記』の論説にもその姿勢を読み取ることができる。久米は日本で培われた思想を軸に置き、ここに米欧のミュージアムというシステムと概念を、博物館や蔵書館などに広がりをもつ博物館として位置づけることが企図だったと捉えられる。当然ながらそれは漢学を土台とするものであった。先にも挙げた福澤の『西洋事情』は、西洋の博物館とその思想の一端を整理して、わが国に紹介した最初の業績と位置づけられる。幕末から明治初期に刊行された『西洋事情』が、明治政府の諸政策に多くの示唆をなすものであったのは周知のとおりである。博物館も同様で、博覧会を土台に博物館の開設を進めた明治政府の動向は、『西洋事情』が示した博物館と博覧会の関係やあり方と相通じる。文久遣欧使節団での見聞を土台にした福澤の博物館の紹介は、西洋における様子をありのままに捉えて理解に努め、人びとへの啓蒙・教育的な価値を見出すものであった。それは西洋社会を追究した洋学者による博物館観といえるもので⁽¹³⁾、この立ち位置において久米は福澤と異なる。

明治政府は、西洋に存在する博物館を、西洋の啓蒙的な意味を保持しつつそのまま取り入れようとした。そのスタンスは『西洋事情』の博物館に重なる。明治初期の博物館に関する他の言説も、ほぼ同様の姿勢をもつ。例えば、栗本錦雲が明治8年（1875）に著した「博物館論」（栗本 1875）は日本の当該論の事端とも評価されるもので、博物館の目的、欧州での種類、人的な組織を紹介し、さらに、啓蒙・実益を見据えてわが国での博物館の必要性を説き、そのため資料収集や目録、経営方法など、幅ひろく論じている。『郵便報知新聞』に投書された本論は、

欧州の博物館とその効能をわが国で実現することを主張する言説で、福澤の見解をさらに押しひろげるものであり、欧州の博物館を是認して受容する観点はその延長上にある。

日本での博物館創設の動向は、設置の布石を企図した明治4年(1871)の東京招魂社での大学南校物産会に始まり、翌年の湯島聖堂大成殿での文部省博覧会の開催を経て、明治6年(1873)に太政官博覧会事務局の山下門内博物館が開設となる。その後、明治10年(1877)に常設の教育博物館を文部省が上野公園内に創設し、明治15年(1882)には農商務省の博物館も同公園内に開館する。いわゆる常設の博物館として設置された文部省の教育博物館や農商務省の博物館の開設時の様相をみると、日本の実情による制約のなかで、モデルとする西洋の博物館のスタイルをいか体現するかが骨子となっていた。これは福澤や栗本と同様の観点であり、博物館を日本で培われてきた思想の延長に位置づける久米のような構えは見出しにくい。

岩倉使節団の明治6年(1873)の帰国から『実記』が刊行される明治11年(1878)までは、わが国の博物館創設にかかわる事態が大きく変動した時期であった。頒布された『実記』は明治16年(1883)までに、一般販売を含めて四刷3500部が印刷されたという(田中 1977a pp.415-418)。政府関係者や有識者層はひろく目にしたのであろうが、博物館施策等への影響を見て取ることは難しい。また、博物館に関する言説において、久米と同様の観点に立つ考究もみつからない。欧化主義のもとで展開されたわが国の博物館思想では、幕政下の漢学思考をもとにした認識や理解は視界の外側に置かれた追究姿勢であった。

おわりに

明治政府は、近代国家を発展させる社会基盤の一つと博物館をみなし、西洋での形態と内容を模倣して取り入れようとした。西洋で成立したミュージアムの移入であるから、必然的な手段であったともいえる。ただし、ミュージアムは施設や組織の形をなすものではあるが、培われてきた思想が結実した実態でもある。この思想は容易に模倣や移入できるものではなかった。

岩倉使節の一行は、幕末の治政や思想の変動を自ら経験し、新たな西洋の知識と制度を取り入れた国家体制づくりを進めようとする人たちであった。久米もその一人であるが、博物館に関する論説をみるかぎり、皇漢学者であることの意識をもって米欧の事物と対峙したという点では、他の団員とはやや異なっていたようである。近世を通して構築されてきた日本の思想のなかに、米欧で定着していたミュージアムを博物館として再構築する姿勢が久米の芯にあった。このような追究は、当然ながら博物館の思想に触れようとするものであり、根幹をなす役割、言い換えれば博物館の理念を探るものだったとみることができる。

文部省の教育博物館は、創設に際して定めた博物館規則の最初に、その目的を掲げていた。「凡ソ教育上必需ナル内外諸般ノ物品ヲ蒐集シ教育ニ従事スル者ノ搜討ニ便シ兼テ公衆ノ來勸ニ供シ以テ世益ヲ謀ランカ爲メ設立スル所ナリ」⁽¹⁴⁾とあり、おもに教育従事者に資するために物品

を蒐集することなどを記している。けれども、なぜ教育従事者を見据えるのか、また何が世の益となるのか、といった理念的な位置づけは示されておらず、開設にかかわる他の資料を探してもこの点を知ることはできない。その後上野公園で開館した農商務省の博物館も同様で、博物館がどのような理念の下で活動するのかを明らかにした記録はみあたらない。設立された博物館の理念、すなわちどうあるべきかの根本は、いずれも謳われていないのである。その要因は、久米のような観点による博物館の考究がほとんどおこなわれなかったからではないかと思慮される。日本の社会で培われてきた思想の先にミュージアムである博物館を位置づけることが不十分であったために、博物館の理念を立ち上げるまでには至らなかったのではないだろうか。

ちなみに、日本の博物館研究では、歴史的・思想的研究のいずれも、日本の博物館を西洋のミュージアムに対照されるものとして議論がおこなわれているが、わが国の博物館の意味を日本という文脈の中で見出していくことでこそ、当事者としての博物館理解になるのだとする川崎真緒の指摘がある（川崎 2023）。日本の博物館を西洋のミュージアムと同様の概念で捉えていこうとする姿勢は、わが国の博物館創設から続くものであり、この点において『実記』に示された久米の思考と理解の検討は、わが国の博物館というものの意味や理念を問い直す契機になると思われる。

本稿ではウィーン万国博覧会の見聞記録は検討対象としなかった。『実記』において「維納萬國博覧會見聞ノ記」は二巻も割き（第82・83巻）、博覧会の意義と目的、歴史を論じるとともにウィーン万国博覧会の規模、列品の配置、各国の出品物の特徴などを詳述している。福澤諭吉が博覧会を博物館と役割を相補完するものとみたように、久米も基本的に同様の見解で博覧会を認識しており、『実記』に示された博物館観をより明確にするには、博覧会論を含めた検討が必要となる。それを包括した分析と考察はつぎの課題としたい。

註

- (1) 本文の引用は底本（『太政官記録掛藏版 特命全権大使 米歐回覧実記』第一・二・三・四・五篇 太政官少書記官久米邦武修 明治十一年十月刊行 御用刊行所 東京銀座四丁目 博文社）による。以降、引用に際して久米の表現のニュアンスを捉えやすいように、語句と文章はできるだけ原文の文字を用い、傍点とルビはそのまま記した。ただし、一部の漢字は支障のない範囲で当用漢字に改めた。月日は『実記』の記載のままに用いており、明治5年（1872）12月2日までが旧暦で、明治6年（1873）1月1日から新暦の表記となる。表1での引用も同様である。
- (2) 『実記』に記載された博物館施設の抽出については、すでに岩本陽児（岩本 1998・1999）と山本哲也（山本 2012）の業績がある。これらを踏まえながら、筆者の観点であらためてとりまとめた。
- (3) 『英和對譯辭書』開拓使、序文・荒井郁謙、明治五年壬申晩夏刻成、書肆 東京日本橋二丁目 小林新兵衛。
- (4) 『太政類典』明治4年3月。
- (5) 久米が記した「豹豺貉貍」の表現について、奇獣数種を四字句で概括しただけの形骸した修辭との指

- 摘もある(中野 1993 p.231)。けれども、漢語熟語の表記には、漢学を修めた久米の認識の反映とみることには無理はないと考える。
- (6) 山本武夫「昌平坂学問所」国史大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (参照 2023.4.6)
- (7) 幕末から明治初期にかけて、伝統的な在来の学問と漢学を、洋学と区別する意図で皇漢学と呼ばれることがあった。この言葉には尊王的な意味合いがあり、多くは日本の伝統を重んじる意図を込めて用いられたようである。
- (8) 岩倉や使節団における「和魂」は西洋に対する概念であり、幕府下の伝統的な学問であった漢学も融合した考え方とみられる。
- (9) 「并屍」の展示に「穢ヲ覺フノミ」とした久米の意識について松宮秀治は、村垣淡路守の感情とも共通し、儒教的というより神道的というべき日本人的生理感覚の「死穢」感であり、これを「道德主義」の産物とみなし、東洋の「徳治」主義政治と西欧の「実務」主義政治に原理に還元して、そこから「夷狄」概念を再構成した優越感の表現と指摘している(松宮 1995 p.263)。しかし、米欧のミュージアムの概念を浮かび上がらせようとした久米の記述において、米欧を夷狄と位置づけた優越感を打ち出す意図はみられない。幕府下で培われてきた朱子学的思想に照らして、自らもそれを容認することができないという素直な感情表現であろう。なお、江戸時代に幕府の官学となった朱子学思想については、垣内景子の考え(垣内 2015)を参考にした。
- (10) ブリュッセルの2月24日の記事にある「博物館」は、「多ク古畫ヲ集ム」「其有名ナル畫工“ロヘン”氏ノ畫アリ」と説明されている。“ロヘン”は“ルーペンス”のことと推察され、そのコレクションで知られる Musées royaux des beaux-arts de Belgique (ベルギー王立美術館)とみてよからう。
- (11) 啓蒙思想家の西周による英語の“fine art”の直訳とするもの、また、ウィーン万国博覧会の参加に際してドイツ語の“schöne künste”を相当する訳語に充てたとする見解などがある(北澤 2020 pp.163-176)。
- (12) 国立国会図書館電子展示会『博覧会 近代技術の展示場』第1部 1900年までに開催された博覧会、第1回内国勸業博覧会、美術館建物, <https://www.ndl.go.jp/exposition/data/R/283r.html> (参照 2023.4.6)。
- (13) 福澤は後に『文明論の概略』をまとめ、諸文明を相対的に捉えて西洋文明の絶対化や単純な礼賛を戒める姿勢を強く示している(福澤 1875)。けれども、『西洋事情』の博物館に関する記述からそれを読み取ることは難しい。
- (14) 教育博物館規則進達, 明治10年10月16日, 公文録文部省之部。

引用・参考文献

- 石井研堂 1908『明治事物起原』橘南堂
- 石井八萬次郎・川副博(編) 1934『久米博士九十年回顧録』上巻・下巻 早稲田大學出版部
- 井上義巳 1978『日本教育思想史の研究』勁草書房
- 岩本陽児 1998「岩倉使節団の米欧博物館見学－イギリスを中心に－(上)」『博物館学雑誌』24-1 全日本博物館学学会 pp.1-10
- 岩本陽児 1999「岩倉使節団の米欧博物館見学－イギリスを中心に－(下)」『博物館学雑誌』24-2 全日本博物館学学会 pp.1-18
- 垣内景子 2015『朱子学入門』ミネルヴァ書房
- 川崎真緒 2023「日本博物館史研究の分析」『全博協研究紀要』25 全国大学博物館学講座協議会 pp.67-84
- 北澤憲昭 2020『眼の神殿－「美術」受容史ノート』筑摩書房(初版は1989年に美術出版社から刊行)
- 栗本鋤雲 1875「博物館論」『郵便報知新聞』明治8年9月29日 第790号 報知社 3-4面
- 駒見和夫 2019「万延元年遣米使節団が出合ったミュージアム」『MUSEUM STUDY』30 明治大学学芸員

『特命全権大使米欧回覧実記』における博物館思考の検討

- 養成課程 pp.15-25
- 駒見和夫 2020「文久の遣欧使節とミュージアムそしてエキシビション」『MUSEUM STUDY』31 明治大学学芸員養成課程 pp.35-52
- 椎名仙卓 1993『図解 博物館史』雄山閣
- 椎名仙卓 2005『日本博物館成立史 博覧会から博物館へ』雄山閣
- 杉谷昭 1991「久米邦武と佐賀藩」『久米邦武の研究』久米邦武歴史著作集別巻 吉川弘文館 pp.49-99
- 武田雅哉 1993「大英博物館を見たふたつの東洋 『米欧回覧実記』と『環遊地球新録』」『「米欧回覧実記」の学際的研究』北海道大学図書刊行会 pp.97-111
- 田中彰 1977a「解説 岩倉使節団と『米欧回覧実記』」『特命全権大使 米欧回覧実記』（一）岩波文庫 pp.393-423
- 田中彰 1977b『岩倉使節団 明治維新のなかの米欧』講談社現代新書
- 中野美代子 1993「『米欧回覧実記』における動物園見学記録と動物観」『「米欧回覧実記」の学際的研究』北海道大学図書刊行会 pp.227-240
- 芳賀徹 1985「岩倉使節団の文化史的意義」『久米邦武と「米欧回覧実記」展－日本を世界にひらく岩倉使節団－』久米美術館 pp.10-12
- 芳賀徹 1990『NHK 市民大学 岩倉使節団の西洋見聞～「米欧回覧実記」を読む～』日本放送出版協会
- 福澤諭吉 1866『西洋事情』初編卷之一 尚古堂
- 福澤諭吉 1875『文明論之概略』福澤氏蔵版
- 松宮秀治 1995「第10章 万国博覧会とミュージアム」『「米欧回覧実記」を読む－1870年代の世界と日本』法律文化社 pp.229-278
- 松宮秀治 2003『ミュージアムの思想』白水社
- 山本哲也 2010「久米邦武の面目－『米欧回覧実記』の博物館に関する記述の評価を考える－」『椋山林継先生古稀記念論集 日本基層文化論叢』雄山閣 pp.620-630
- 山本哲也 2012「久米邦武と岩倉使節団報告『米欧回覧実記』」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第13号新潟県立歴史博物館 pp.95-110
- 吉田常吉（編）1959『航海日記』時事通信社

表1 『特命全権大使米欧回覧実記』記載博物館一覧

*日付は明治5年(1872)までが旧暦, 明治6年(1873)から新暦

アメリカ - 明治4年(1871)12月6日 ~ 明治5年(1872)7月3日	
12月9日, サンフランシスコ	ウードワルト ^{パーク} 公苑: 禽獣園草木園博物館, 及ヒ藏書館ヲ兼タル場
12月28日, ソルトレーク	博物館, 背ニ禽獣園アリ: 聊カ各種ノ物件ヲ集ム
2月25日, ワシントン	「パテント, オヒス」: 褒巧院ノ義ナリ / 部ヲ分チテ新發明ノ器械, 及ヒ錐形ヲ叙列ス
3月10日, ワシントン	「スミノニヤン」: 學校ノ一ナリ / 器械諸件モ備足シ, 府中屈指ノ大校ナリ
3月16日, ワシントン	「ヂョーチ, タウン」ノ司文臺 (Georgetown University Astronomical Observatory/ ジョージタウン大学天文台): 最上層ニ大鏡ヲ安ス
3月23日, ワシントン	勸農寮: 「アグリクリチュワル, ホール」ト云 / 凡牧畜ノ諸獸ヨリ, 虫豸ノ脱身ニ及フマテ, 一ニ之ヲ乾藏, 若クハ火酒浸シニシテ蓄ヘオク
5月9日, ナイヤガラ	博物館 (カナダ領): 主トシテ湖水ヨリ出セル貝類化石類 / 礦石類禽獸ノ骨 / 外國ノ品 / ミーラ
6月24日, フィラデルフィア	「ブロー」街ノ博物館: 米國第一ノ大院ナリ
イギリス - 明治5年(1872)7月13日 ~ 11月16日	
7月16日, ロンドン	「ケンシントン」ノ博覧館 (South Kensington Museum/ サウスケンジントン博物館): 一千八百五十六年ヨリ創立セル, 常博覧會ナリ / 藝術用細工物 / 書庫 / 美術ニカハル畫圖ノ類 / 鐵ノ諸器械 / 石像 / 書籍教育ノ具 / 食用品 / 建築用ノ物
7月17日, プライトン	博物館: 「プライトン」ノ駅… 其傍ナル 水族室 (Sea Life Brighton/ プライトン水族館): 此ハ魚類ヲ生活セルマ、ニ養ヒオク室ナリ
7月28日, ロンドン	「ヂョーロチ, カーテン」 (The Zoological Gardens/ ロンドン動物園): 禽獣園ノ謂ナリ / 此園ノ盛ナルコト, 歐洲ニ其比ヲミス
8月4日, ロンドン	「フリンズ, アルベルト, ロード」ノ博覧會: 會ノ長「マショールウイントン」迎ヘテ案内シ
8月5日, ロンドン	武庫: 「ウィンザカッソル」 (Windsor Castle/ ウインザー城) 城中 / 戎器ヲ藏ス
8月8日, ロンドン	武庫司ノ武庫倉: 露西亞及ヒ支那ニテ分捕セシ大砲等ヲ列置スル
8月16日, ロンドン	「タワー, オフ, ロントン」 (Tower of London/ ロンドン塔): 楼上ヲ寶庫トナシ / 武庫アリ
8月17日, ロンドン	水晶宮 (The Crystal Palace): 原名ヲ「キリスタル, パレイス」ト云, 水族室アリ
8月25日, ロンドン	「ブリッチ, ミジエム」 (British Museum/ 大英博物館): 大英博物館ノ謂ナリ / 歐洲ニ轟ケル大館ニシテ, 万室ミナ備ル / 書庫ニハ七十五万冊ヲ藏ス / 礦石ノ室 / 博古ノ室
8月30日, リバプール	博物館: 海石 / 禽鳥 / 海獸鱗介 / 諸獸骨 / 陶器石器博古器 / 藏書 / 名畫 / 石彫ノ像ノ室
9月12日, エジンバラ	「インヂストリア」博物館: 器械製造ノ考証ニ設ケタル場ナレハ, 製作ノ品物ヲ排序スルニ, 注意ヲ加ヘタリ
9月21日, ニューキャッスル	天文臺: 当府ノ有姓某, 私ニ取立タル天文臺ナリ / 月星圖, 及ヒ日耳曼ノ天象精圖ヲ, 写本ニテ藏ス
10月2日, ウォーリック	博物館: 知事ノ宅 / 家ノ最上層ニ, 動物, 礦石, 古器ヲ集メテ室ニ満テリ
10月25日, レディング	農業展覽場: 農業展覽會ハ, 勸農会社ト相待テ, 此業ノ勸奨トナリ, 進歩ヲ促ス緊要ノ會
フランス - 明治5年(1872)11月16日 ~ 明治6年(1873)2月17日	
11月20日, バリ	觀場: 人造ニナリテ, 天設ヲ欺ク / 「バナラマ」ト謂フ, 油畫ノ展覽場ナリ

『特命全權大使米欧回覧実記』における博物館思考の検討

1月6日, パリ	書庫 (Bibliothèque nationale de France/ フランス国立図書館) ニ附属セル博古館: 蓄へタル古器, ミナ類ヲ抜ク, 精選ノ珍器ニテ 「コンセルワトワル」(Conservatoire/ コンセルヴァトワール) ノ博物館: 農業工 藝ノ諸器械ノ常博覧場ナリ / 館ニ附属シテ學校アリ, 講壇アリ
1月15日, パリ	「ヴェルサイル」ノ宮中 (Musée de l'Histoire de France/ フランス歴史博物館): 室房甚多ク, 一兩日ノ觀尺ス所ニ非ス
1月19日, パリ	「フォンテンブロー」ノ王宮 (Musée Napoleon 1er/ ナポレオン1世博物館): 新 古ノ歴史ニ関シ, 并セテ採風ノ士ノ必觀スル名所ナリ
1月20日, パリ	「レキシエンブルク」ノ王宮 (Musée du Luxembourg/ リュクサンブール美術館): 各室房ニハ, 畫圖ヲ集蓄シ, 器什ヲ陳列シ
1月22日, パリ	「オフスセル, ウェルトア」: 巴黎府ノ天文臺ナリ
2月2日, パリ	禽獸園: 「ボアデブロン」ノ苑ノ近地 / 鳥獸ヲ集ムル頗ル備ル
ベルギー・オランダ - 明治6年 (1873) 2月17日 ~ 3月7日	
2月24日, ブリュッセル	博物館 (Musées royaux des beaux-arts de Belgique/ ベルギー王立美術館, か): 多く古畫ヲ集ム
2月28日, ライデン	此府ノ大學校 (Universiteit Leiden/ ライデン大学) ニ附属セル博物館: 動物ノ室 / 博古館 / 東南洋ノ博物館
3月1日, ハーグ	博物館: 日本支那ノ物品を集メ甚タ富ム 藏畫館 (Mauritshuis/ マウリッツハイス美術館) 博古館: 埃及, 希臘, 羅馬ノ古器ヨリ, 諸國ノ古器ニ及フ
3月2日, アムステルダム	集畫院: 名畫古畫ヲ二層ナル高宇ノ樓ニ蓄フ, 常ニ府中ノ畫人來リ, 就テ摸写シ, 其法ヲ學ヒテ, 美術ヲ講究スル為メニ設ク
3月6日, アムステルダム	禽獸園: 禽鳥ノ類モ甚タ多シ / 園中ニ一館ヲ起シ外國ノ異貨ヲ集ム / 魚兒ヲ養フ 室アリ
プロイセン - 明治6年 (1873) 3月9日 ~ 3月28日	
3月10日, ベルリン	禽獸園: 「チェル」ノ大公園ノ一部分ニ屬ス 水族觀: 「フランデン, ユェルゲルトール」(城門通り) ノ広街ニアリ
3月14日, ベルリン	博物館 (Altes Museum/ 旧博物館か)
3月15日, ベルリン	集畫館: 王宮 (私宮) ニ前ニアリ, 大抵此ニ集メタル畫ハ近代及ヒ現今ノ名畫ナ リ
3月16日, ベルリン	武庫: 各國ノ武庫ヲ回レハ, 武器ノ歴史ヲ目睹シテ, 俯仰ノ感少カラス
3月25日, ベルリン	漁業會社ノ展覽場: 生魚ヲ生鮮, 或ハ乾藏物ニテ, 各種品列シ, 漁舟, 漁具, 海 岸ノ雛形ヨリ, 近國ノ漁具ヲ備ヘ, 并セテ南東洋ノ漁業ニ及フ
3月27日, ポツダム	藏畫館: 「無憂宮」(Schloss Sanssouci/ サンスーシ宮殿) 庭園内 / 古畫多ク
ロシア - 明治6年 (1873) 3月30日 ~ 4月14日	
4月2日, サンクトペテルブルク	農業博物館: 帝宮ノ左側, 諸物器械ヲ備へタル 帝宮内ニ設ケタル寶庫 (Hermitage Museum/ エルミタージュ美術館): 室中廊中, ミナ寶器ヲ羅列シ, 細大ミナアリ
4月10日, サンクトペテルブルク	礦山學校ノ博物觀: 館中ニ集メタル, 礦山ノ器械雛形アリ, 各國ノ礦内ノ縮形ア リ
北ゲルマン・デンマーク・スウェーデン - 明治6年 (1873) 4月15日 ~ 4月29日	
4月18日, ハンブルグ	禽獸園: 鴟鴞ノ族ヲ養フ / 水禽ヲ放チ / 水族觀ヲ設ケ / 禽鳥 / 獸畜 / 鱗介ノ屬
4月20日, コペンハーゲン	博物館: 歐羅巴ノ北洋中ナル, 氷洲, 綠洲, 又東西印度, 南東洋ノ諸島等異俗ノ 國ヨリ, 諸物ヲ集メテ排陳シタルモアリ, 是ヲ民種學ノ博物館ト名ツク 博物館: 此ハ美術館ニテ, 重ニ石雕ノ像ヲ蓄フ

駒見 和夫

4月25日, スtockホルム	博物館:天ヨリ隕タル大石, 禽鳥類, 甲虫類, 貝類, 海草類, 化石類, 農業工藝ヲ教ヘル用意ニテ / 工藝博物館ノ式ニ類シ
4月26日, スtockホルム	博古館:当國ノ振古四千年前ヨリ用ヒタル物ヲ陳列ス, 所謂ル「スカンデナビヤン」ノ古物ナルモノナリ, 上層ヲ以テ畫楼トス
フランクフルト・バイエルン・イタリア - 明治6年(1873)5月1日~6月2日	
5月4日, フランクフルト	禽獸園:巨象ヲ圈養ス, 其他ノ諸獸モ略備レトモ肥沢ノ態ニ乏シ
5月6日, ミュンヘン	藏畫館:新古ノ兩館アリテ双列セリ / 古畫ノ館 (Alte Pinakothek/旧絵画館) / 新畫ノ館 (Neue Pinakothek/新絵画館)
5月9日, フィレンツェ	博物觀 (Galleria degli Uffiz/ウフィツィ美術館):希臘古代ノ雕像, 石像ヲ羅列ス, 名畫新古ノ美ヲ萃ム 博古館 (Museo Archeologico Nazionrle di Firenze/フィレンツェ国立考古学博物館):古甲, 古兵, 銅像, 象牙, 琥珀, 瑪瑙, 其他寶石ノ細工, 古代ニ陶器等多シ
5月14日, ローマ	聖彼得寺ノ博物館 (Musei Vaticani/バチカン美術館):教皇ノ寶庫 / 歐洲列國ノ博物館ニ設ケタル美術室ハ, 僅ニ此館ノ一片ヲ摸セルモノト謂テ可ナリ
5月16日, ローマ	「カピトル」ノ博物觀 (Musei Capitolini/カピトリーノ美術館):此ニ蓄フ所ノ古石像, 尤モ古時ニテ有名ナル, 粹美ノ像ヲ集ム
5月21日, ナポリ	博物觀・館 (Museo Archeologico Nazionale di Napoli/ナポリ国立考古学博物館)-博物觀と博物館の語が一文に混在:古キ器物 / 圖畫 / 名像 / 「ボンベイ」ヨリ出タル器物
5月29日, ヴェネチア	「アルチーフ」ノ書庫:紀元七百年來ノ文書典冊ヲ蓄藏ス, スヘテ一百三十万冊ニ及フ
5月30日, ヴェネチア	玻璃博物觀:羅馬時代ノ玻璃器ヲ藏ス
5月31日, ヴェネチア	藏畫館 (Gallerie dell'Accademia/アカデミア美術館):畫學頗ル多シ
オーストリア・スイス - 明治6年(1873)6月3日~7月15日	
6月7日, ウィーン	武庫:武器庫ノ屋造, 尤モ高大ナリ
6月14・16・17日, ウィーン	博覽會ヲ回覽ス:「維納萬國博覽會」(Weltausstellung 1873 Wien/ウィーン万国博覽會) - 「維納萬國博覽會見聞ノ記」として『実記』第82・83卷に詳述
6月27日, ベルン	博物館:此館ノ規模ハ大ナラサレトモ, 諸物ハ略備レリ
7月8日, ジュネーブ	武庫:古來ノ甲冑, 刀戟, 旗幟ヲ蓄フ

Examination of the Idea of a Museum as Implied in the *Report of the Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary to the United States and Europe* (1878)

KOMAMI Kazuo

The purposes of this paper are to grasp KUME Kunitake's (1839-1931) understanding about museums and to clarify the historical significance of Kume's discussion on museums in the context of the development of Japanese perspectives on museums in the late nineteenth century when a museum as an institution and system was virtually unknown in Japan. Kume was a historian and Confucian scholar. Kume and 44 other statesmen and diplomats accompanied Ambassador IWAKURA Tomomi (1825-1883) who visited the United States and Europe from December 23, 1871 to September 13, 1873. Once the mission returned to Japan, Kume compiled and wrote the *Report of the Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary to the United States and Europe* (1878).

The Report includes Kume's discussions on museums they visited in the United States and Europe. Not only did Kume describe the facilities and exhibitions of museums, but KUME also compared the Japanese and East Asian ideas of museums with the European and American ideas of museums in order to approach the essence and universal principles of museums.

In order to grasp Kume's understanding about a museum as an institution, the author examines how the English term "museum" and other institutions, such as aquarium and observatory, was translated into Japanese. The author observes that the translated terms in Japanese came to be definite when the Report was published. The author then analyzes Kume's discussion on museums from the standpoint of Kume's ideological background based on the education he had received, in order to understand Kume's recognition of the role and contribution of museums. The author observes that Kume attempted to place a museum in the context of Japanese ideology.

Kume's recognition of a museum in the context of Japanese ideology is very unique at that time and should be distinguished from other Japanese scholars knowledgeable about the Western culture in the late nineteenth century. FUKUZAWA Yukichi (1835-1901) was a representative of such Japanese scholars. Fukuzawa visited the United States in 1860 and 1867 and Europe in 1862 and published the *Seiyō Jijō* [Western Circumstances] in 1866, 1868, and 1870. Scholars represented by Fukuzawa made every effort to Westernize Japan and described aspects of museums in that context.

Kume could not make the philosophy of a museum clear, and therefore his discussion on a museum in the *Report* exerted little influence on the subsequent Japanese policies concerning museums in Japan. This was so also because his recognition and understanding of museums based on his Confucian ideology characteristic of the Tokugawa regime was likely to be ignored in the early Meiji era when Japan attempted to Westernize itself.

Still, Kume's thoughtful attitude toward a museum would have been very meaningful in order for Japan to adopt a museum as an institution and system. Japan's lack of examining

駒見 和夫

museum from ideological and philosophical perspectives is one of many reasons why Japanese museums do not retain philosophy today.

Keywords: Museum philosophy, Confucian ideology, Japanese museums, early Meiji era history of modern Japan.